

7) Barrett 食道に合併した腺癌の1例

○村山 裕一・清水 春夫 (村上病院 外科)
 渡部 重則 (同 内科)
 佐々木公一 (厚生連中央総合
 病院 外科)
 渡辺 英伸 (新潟大学
 第一病棟)

症例は62歳男で胸部不快感を訴え来院，内視鏡検査にて食道癌と診断され入院した。食道X線造影では下部食道に約4cmの境界比較の明瞭な表在隆起型の病変を認めた。内視鏡検査では，門歯裂より34～37cmの前壁に数個の小隆起を伴う凹凸不正で易出血性の隆起性病変が見られた。生検にて中分化型腺癌と診断され，平成元年3月20日手術を施行した。病理診断は37×20mmの表在隆起型でmp, ly(-), v(-), n(-), Stage Iであった。病変部より口側は扁平上皮からなる正常食道粘膜であり，肛門側は胃粘膜がみられ，病変部周辺は重層扁平上皮とGoblet cellを伴う円柱上皮が混在していた。また癌病巣の中に扁平上皮の残存がみられたことよりBarrett食道腺癌と診断した。

8) 胃癌の原発巣と壁内転移巣の形態学的鑑別診断

○宮崎 有広・渡辺 英伸 (新潟大学
 第一病棟)
 岩淵 三哉・山中 秀夫
 佐藤 敏輝・多田 哲也
 衛藤 薫

多発胃癌と胃癌の壁内転移の鑑別を目的に，壁内転移18病巣と単発の原発性粘膜下浸潤胃癌22例を形態学的に比較検討した。

壁内転移は，原発癌に比し，粘膜下癌浸潤面積/粘膜内癌浸潤面積が大きく，癌露呈部の形状係数が小さく，粘膜内の癌の断面形が台形となることが多かった。また，粘膜内の組織像では，壁内転移は，分化型13例では，内腔に向かう方向性を持つ癌腺管群を全く持たないことが多く，未分化型5例では，全て低分化充実癌であり，各々原発癌と異なった。

これらの項目は，壁内転移と原発癌を鑑別するのに有用であると思われた。

9) AFP 産生胃癌の1例

○植木 匡・須田 武保 (南部郷総合病院
 外科)
 鰐淵 勉・佐藤 巖
 片柳 憲雄・山中 秀夫
 前田 裕伸 (同 内科)
 青柳 豊 (新潟大学
 第三内科)

症例. 46歳女性. 昭和63年より胸やけあり. 近医にて胃癌と診断され, 術前 AFP が 19147.1 と高く AFP 産生胃癌を疑い当院にて胃全摘術をおこなった. CT・Angio. にて肝に腫瘍や転移の所見はなく, 術中の肝の楔状切除標本でも肝炎や肝硬変の所見はなかった. 切除標本では, 胃前庭部前壁に Borr. II型病変があった. 術中所見では, $H_0P_0S_0N_1$ であった. 現在, AFP は再上昇し術後4カ月目のCTにて転移巣を認めている. 本症例は, AFP 産生部がPAP法により染色されたことからAFP産生胃癌であり, 病理組織が髄様型を示し免疫電気泳動法にてConcanavarin-A結合性亜種の割合が85%と, 肝癌型の95±7%に近い. AFP産生胃癌の分化方向が組織学的にも, 生化学的にも, 肝細胞癌類似の分化に向いていることを裏づける.

10) Campylobacter pylori の臨床的研究

○鈴木 健司・吉田 俊明 (信楽園病院
 消化器内科)
 村山 久男

【目的】Campylobacter pylori (以下CP)の臨床的特徴を検討した。【対象】上部消化管内視鏡検査を施行した138症例(男77名, 女61名. 年齢は30歳から88歳までで, 平均年齢59.9歳)。【方法】腸上皮化生のない胃前庭部の一か所より生検を施行し, 培養法によりCPを検出して検討した。【成績】1. CPの陽性率に性差はみられなかった。2. CP陽性群は陰性群に比べ, 平均年齢が有意に低かった(陽性群53歳, 陰性群63歳)。3. 胃十二指腸基礎疾患各群においてCP陽性群は平均年齢が低い傾向がみられた。4. CPと胃十二指腸疾患(胃炎, 胃・十二指腸潰瘍, 潰瘍癒痕)に関連性がみられた。5. CPとH₂blockerに関連性がみられた。6. CPと肝疾患, 食道静脈瘤, 腎不全(HD, CAPD)との間に関連性はみられなかった。

11) 内視鏡単独胃集検の検討

羽賀 正人・山川 良一 (新潟勤医協
 下越病院内科)
 坂井洋一郎
 安達 哲夫・外山 両右 (舟江病院内科)
 関川 智子 (同白山診療所)
 大関 道義 (同神田診療所)
 高畑興四夫 (同沼垂診療所)

(目的)今回我々は胃集団検診を内視鏡単独で行い, その有用性について検討したので報告する。(対象)1984年から約5年間, 当医療協会社員を対象に施行された内視鏡胃集検はのべ3885人であった. 受診者は40市町村に及び下越地方が約3分の2をしめた.(結果)発見された胃悪性腫瘍は胃癌17例(0.43%) (早期癌13例, 進